



〔時評〕

入口と出口

学校法人工学院大学 理事長 大橋 秀雄

大学は毎年新しい学生を受け入れ、教育を通じて人間的・専門的成長を促して社会に送り出す。すなわち入口と出口がある。

新入生諸君は、入口を見て志願を決める。だから、若い人たちに魅力的な入口を用意しなければならない。ここで学部・学科など組織の名前が重大な影響を持つことになる。若い諸君は、未来に夢をかける。伝統のある漢字だらけの名前は、どうしても堅く古そうなイメージを払拭できず、カタカナ混じりの何となく新しそうな名前に比べて歩が悪い。新設や改組によって生まれる学部・学科名は、かくしてカタカナが氾濫し、まさにコピー感覚で名前が生まれてくる。

ところが話が出口に及ぶと、様相は一変する。就職に当

たり、企業の人事担当者がいちいち「何を勉強し、何ができるのですか？」と尋ねなければならないようでは、どうしてもハンデを負ってしまう。出口に関する限り、古く伝統的な名前の方が依然有利である。

ここに、未来への夢と現実のギャップがある。私はかつて東大工学部で三十余年間、この入口と出口の乖離をつぶさに観察してきた。教養学部から工学部の各学科へ進学するに当たり、夢のある学科が人気のトップを占めてきた。例えば航空宇宙学科である。ところがいざ就職となると、航空宇宙産業は自動車産業の三十分の一程度に過ぎず、ほとんどの卒業生は航空宇宙以外の分野に散らばって行く。日本の自動車産業が強い秘密の一つに、航空宇宙産業が弱体なお陰で優秀な技術者を確保できたという皮肉な結果

がある。

入口と出口の乖離が、夢は夢、現実には現実と割り切れる大人の世界の話なら問題はないが、大学入学前の高校生相手では、何か現実を蓋をして夢だけを追わせるような後ろめたさを拭い去ることはできない。

自由競争とコモーションリズムでは、アメリカのほうが先行しているはずである。株式会社が経営する大学が大きく伸びている現実からも、競争は日本以上に激烈である。しかし学部や学科の名称から見ると、意外と保守的で、私に関係する工学分野では、依然伝統的な名前が主流である。イギリスなど、ヨーロッパ諸国の現実も同じである。

その理由はどこから来ているのか考えてみたい。わが国ではこれまで、大学とは高度な学問を身につける場であると、教える側も教えられる側も信じてきた。しかし欧米諸国の大学では、例えば工学教育についていえば、プロとしての技術者になるための基礎教育の場として捉えられている。国際的に通用する技術者には、国際的に容認された技術分野があり、教育もそれに対応するものが求められる。従って大学における学科名称も、そこから大きく外れることはない。

大学教育に、プロとなるための基礎教育としての位置づけが希薄だったわが国の特異性が、まるで流行語を追うよ

うな百花繚乱の学部学科名称を生み出した根元のようなうである。

理工系分野では、国際的に通用する技術者になるための基礎教育として充分かどうかを判定し、基準に適合する教育課程だけを認定する制度が平成十三年度から始まっている。その実施母体が、日本技術者教育認定機構（JABEE）である。そこでは、学問を教えることよりも、学問をもとに高度な職業を果たせる人材を育成することが教育の目的として据えられている。入口と出口の乖離は基本的に抑えられるはずである。

高度に発達した現代社会は、様々な専門性を担う職業を必要としている。信頼できる社会は、まさにこのような職業を誠実に果たす人たちによって支えられている。フリーターが溢れる社会は、たとえ失業率が低くとも、信頼感が薄く脆弱な社会となるであろう。かつては、大学人に職業人教育の話をするとは異端児のごとく扱われたが、国際的に見ればそれこそが異端である。我々は、学生諸君の長い将来を考えながら、生涯にわたって誇りを持って生きられるように、それに相応しい入口と出口を準備しなければならぬ。